反戦闘争と「三池の闘い」

―長崎公演の民泊から―

港務　森　光広

エンプラ守る警官

長崎は二十三年前原爆の被災を受け、今日では原子力艦隊の戦略基地化に対して「動く核基地、ベトナム侵略反対、七十年安保破棄」の闘いの前衛地である。

一月十七月佐世保駅に下りた学生に対して、警察は所持品検査を行なう暴挙にでた。エンタープライズの寄港阻止目的の学生だからであった。このような挑発的警備の中からこそ、平瀬橋の第一回目の衝突事件が起きた。

平瀬橋には、道路も鉄道引込み線も、有刺鉄線のバリケードではりめぐらされ、その背後には機動隊を何百と警戒させ、放水車、装甲車が配置されていた。橋を渡れば左右が米軍基地で、そこから出撃する米軍はベトナム人民を殺していたからだ！これを守る日本の警察権力に市民も憤激し、ましてやエンタープライズ寄港阻止のために佐世保駅に下りた学生に表現の自由さえうばう暴挙にでた権力に対して青年学生の怒りは爆発した。

催涙ガスを混ぜた水を放水し、このため皮ふまでただれ、その上に二百発のガス弾を打ち込み、数百名の機動隊が学生を三方からかこみ、おそいかかった。逃げ場を失った学生は、機動隊の警棒で〝めった打ち〟された。近くの市民病院に逃げこんだ学生を数人の機動隊がおそって〝なぐった〟。みかねた市民（五十四才）と報道関係者が中に入ってとめにかかったところが三人をめった打ちにし入院する重傷をおわせた。

平瀬橋の上で機動隊に抗議する市民たち

手を上げて迫った市民

これらを目前に見、またテレビで見ていた市民は怒りに燃えた。だが組織を持たない市民・家庭の主婦たちはなすべきすべを知らないため十八日、十九日、二十日はテレビにかじりつき、または現地にでてきて警察の暴挙をヤジっているのみであったが、二十一日第二次統一集会開催後、デモ行進に移ったデモ隊は許可されたコースを行進し進んできたところが警察は佐世保橋を放水車、装甲車と機動隊でしゃ断しコースの変更を通告してきた。デモ隊は「警備を解いて通せ」と迫った。この頃到着した学生は実力で突破する行為にでた。……

学生・労働者が一体となった行動が佐世保橋で展開された。組織されたデモ隊が引き上げたあとも市民は動かなかった。指揮者もいない市民は怒りに燃え「市民の道を通せ」と一時間半にわたって抗議した。この市民に警察は放水した。

怒りに怒った市民は両手を高く上げ「私たちは何も持っていない市民の道を通せ」とジリッジリッと機動隊に迫った。警察は市民の要求に屈して警備体制を解いて市民を通した。

勇気ある人間が共に手をとり合って

このときの市民の中に私が民泊した山下弘文さんの奥さんがいた。この人たちが長崎へ平連へと発展したのである。現在の長崎へ平連の活動は毎月第三日曜日、第四土曜日の午後から繁華街、住宅街をゼッケンをつけて静かなデモを行ない、終って反省会を開いていいたいことをみんなだし合い話し合う。次の行動日には一人が三枚のビラを書き、目に付きやすい所にハリ、また一人ひとりを一緒につれて参加しよう！とみんなで約束し解散している。

その活動を続けておられる山下八千代さんからの便りを紹介します。

御業警有難とうございました。十四日の『三池の闘い』を見て、感激の余いんが続き終えません。みなさん本当にお疲れさまでした。私はいまはじまったばかりでヒョコの段階でしかありませんが今後ともどうかよろしくお願いします。仏く者の心はみな一身同体なのだということを忘れてはならないと強く感じます。昨日は長崎反戦青委の「十九日闘争の日デモ」でしたが、私は子どもと三人で親子のゼッケンを背中につけて繁華街を歩きました（デモ隊より二十米先でしたが……）

何んでも勇気と誇りが大切だということも自分で考えました。自分は絶対に正しいことをしているのだということを確信し、世の中の悪をバクロするために、勇気のある人間がともに手をとり合って頑張っていきましょう。

森さんもどうか三池の勇士とともにご奮闘下さい。どうかみなさんにもよろしく。どなたでも長崎にこられましたときはお二人ぐらいならせまい家でも辛抱して頂けますのでご利用下さいますようにではお体に注意してネ

（港務所転場新聞「スクラム」から）

詩欄

生きた「しかばね」

白井　平田千佐子

ガス患者にされて
四年の歳月は流れた
私はまだ若い
ガス患者にされなかったら
恋人も二、三人は居た頃だ

ベッドに寝て以来
自分一人で立ち上がることも出来ない
人の言っていることは　よく聞こえるが
自分でしゃべることが
まったく出来ない
母と病室の患者以外には
まじわる事が出来ない

この前、健康であった母が
病気で倒れた
私は三日食事をしなかった
腹がすいても
母以外の人とは
食事をする事が出来ない

人がとっても恐しい人間にされ
自分ながら　わからない
うれしいこと
悲しいこと
顔に表現するほかは
どうすることも出来ない

自分でしゃべることが出来たら
くやしいがどうすることも出来ない
しゃべれる人がうらやましい
健康である人がうらやましい
御見舞にくる人がうらやましい

会社の保安サボが
私の体をこうした
私がまともな体なら
七代の孫にまで
炭鉱に下がるなと言い聞かせたい

この事さえ考えのつかない
若き生きたしかばね

病院素描

三川　小柳重義

苦しみと、忍耐と、希望と、
あしたの羽ばたきを
ぢっとまっている。
孤独に耐えて生きる
CO患者――。

岸壁にひたひたと
押し寄せる白い波
それは
海のない港？
病院！

白い蝶々の看護婦さん
よろしく頼みます。
窓を開ければ
緑の朝風が
遠く白雲を歩ませて
足ばやな音楽を
奏でてゆく。
三池の埠頭
解らん解らん
出帆々々

とぶようにはためく
遠い旗の合図。
入院のCO患者は
いつ帰る
いつ復帰する。

（職場新聞〝あせ〟から）

エプロン

―物価メーデーより―

四山　堀前春男

純白のエプロン
夫を守るエプロン
子どもを守るエプロン

そのエプロンが
あちらの地域から
こちらの地域から
集まってくる
くらしを思い
しあわせを願い
一点の汚れもない
そのエプロン

やがてそのエプロンは
働く者の怒りの渦の中で
列をつくり
八方にひろがっていった

どこまでも
どこまでも
どこまでもひろがっていった

ぼくの家

六年　浜崎光広

ぼくの家族は三人だ。前は四人だったが、父が、三池炭こうのばく発事故で死に、今では、かんご婦の母、ぼく、それと小学三年の弟と、三人でくらしている。だいたいぼくたちは、父が死んだので、社たくを出ていかなければならないのだが、母が炭こう関係の平井分院にかんご婦として働いていたので、出ていかなくてよかったのだ。

ぼくは母の仕事を、人を助けるいい職業だと思うが、ぼくにとってはきらいだ。それは母にとう直があったり、日曜でも、でらなければいけない時があるからだ。とう直の時は、朝出て行き、次の日の夕方までかえらないのだ。

その時は、夕方ごはんをたき、おかずは近くの食堂からもってきてもらうのだ。夕食をすませ、勉強もすませると、ふとんをしき、とじまりをしなければならない。それから弟と二人でねるのだ。ねる時は、さみしく、「こんな時父がいたらなあ」と思うことがある。それから朝七時に起きる。いつもなら、母におこしてもらうのだが、この時はそうもいかない。

インスタントラーメンを作り、弟に食べさせ、学校へ行くのだ。つまり、一日母ということになる。これが、月に四～五回あるのだ。また、たまの休みでも母は、「家の仕事がたまっている」いってする。ぼくが、いちばん母の職業をにくむ時は、正月である。いつもとう直が三十一日か一日にあるので、ぼくたちは、家で正月をむかえたことがない。毎年三十一日は熊本の親せきの家に行き、正月はそこでむかえるのだ。

こんな時は、友達をうらやましく思う。

でも、めずらしく休めた日は、遊びにつれていってくれる母。前々からたのんでいた自転車を、せん月かってくれた母。でも兄弟げんかではきびしくおこる。母は、「にいちゃんだからがまんしなさい」ですましている。いくら「がまんせんね」といわれても、弟がわるい時はほん気になり、けんかをする。まけるのに、向ってくる弟にはがたつ。ちょっとのことでもけんかになる。弟があまり大声でどなるので、母は、あきれた顔をしておこる。

「そんな兄弟のどこにおるね」といつもいう。そして、ぼくたちのいちばん悪いくせである、あとしまつだ。何かをして、そのままにしておくと、「光ちゃん、あとしまつ」といい、口ぐせのように「六年間もいっているのに」という。

ぼくの家では、そろばんじゅくをしている。まえは父がしていたが、今は、父の弟のおじさんがしている。父がいきているときは習っていなかったので、母はいつも「ならっとくとよかったのに」という。でも今は二級になった。

いつも母は、ごはんのあとかたづけがすむと、ぼくたちの勉強を見てくれたり、いろいろ話したりして、少ない家族でも楽しい家です。

（浜崎光広くんのお父さんは、昭和三十八年十一月九日の三川鉱大爆発の犠牲になり亡くなった。お母さんのミツエさんは現在天領病院で三池労組員として闘っている。光広くんは雑誌「熊本教育」が募集した県生活コンクールに応募し、入選した。これはその作品である）